



# Michael Landau

スター・セッション・  
ギタリストの魅力に迫る!

by Jun Kawai(*guitar*)

pix ● Hiroshi Homma



いつの時代にもスターと呼ばれるセッション・ギタリストはいるもので、ジェイ・グレイドン、スティーヴ・ルカサー、ダン・ハフ、最近ではティム・ピアースなどがその代表と言っていざらう。いずれのギタリストにも共通していることは、セッション以外に自分の好きな音楽もバンドを組むなどしてプレイしたいと強く望んでいることで、実際にジェイ・グレイドンはAIR PLAY、スティーヴ・ルカサーはTOTO、ダン・ハフはGIANTで商業的にも成功を収めており、ティム・ピアースもソロ・アルバムをリリースしているのは知っている通りだ。そして、このマイケル・ランドウも誰もが認めるようにスター・セッション・ギタリストの1人である。彼のこれまでの活躍ぶりは、P.72

## スティーヴ・ルカサーが鍵を握ったセッション時代

—ここしばらくはヴォンダ・シェパード（シンガー・ソングライターでマイケル・ランドウの奥方）のツアーでLAを離れていたんですね。

MICHAEL LANDAU（マイケル・ランドウ）：うん、2週間ぐらいだけで、東海岸の方まで行ったんだ。彼女は毎月1回、ハリウッドの『トゥルバドール』でライブを定期的にやっている。そして、僕のTHE RAGING HONKIESの方は、11曲収録した2ndアルバムのレコーディングしたばかりだね。THE RAGING HONKIESも月に1~2回ライブをやっているし…。

—セッションの方は？

MICHAEL：5年前の忙しさに比べるとそんなに大変じゃなくなったよ。ソロ・シンガーよりも、今はバンド単位で活動しているアーティストの方が多いいかな。でも、相変わらずどんどん仕事は入ってくるんだけどね。

—では、今回は本誌初登場ということで、あなたのこれまでの活動歴について伺いたいのですが、最初に音楽に興味を持ったのはいつのことですか？

MICHAEL：ジョニー叔父さんっていう（笑）、ギターが強い親戚がいてね。彼はよくアコースティック・ギターを弾いていて、それに興味を持ったんだ。別にプロというわけじゃなくて、たまに時間がある時にプレイしてるって感じだったから、8~9歳ぐらいだったかな、コードを少し教えてもらい、それがきっかけになったわけ。それからTHE BEATLESをテレビで観て、人生が変わったんだよ。

—生まれも育ちも南カリフォルニアですよ？

MICHAEL：そう。ヴァン・ナイズの出身なんだ。育ったのはロサンゼルス市内なんだけど、THE BEATLES、THE ROLLING STONES、CREAM、ジミ・ヘンドリックスといった音楽から聴き始めたんだ。アメリカにいても、当時ラジオで掛かっていたものは、イギリスのバンドが多かったんだよ。

—最初に買ったレコードは？

MICHAEL：ハロウィンのシーズンになると出てくるドーナツ盤さ。「MONSTER MASH」という子供向けの歌だった。もう誰か歌っていたのかも忘れてしまったけど、母親がかなりの音楽好きだったせいで、赤ん坊の頃からおもちゃとしてドーナツ盤とよく遊んでいたらしいよ。ベッドの中でシングル盤を持ち込んで寝てたらしいからさ！

—割ったりしませんでしたか？

MICHAEL：割った記憶はないな。3歳の時に目に鉛筆を刺してしまって、病院にかつぎ込まれたことはあったけど。当時はパンク・ロックに入れこんでたからね（笑）。

—最初に観たコンサートは？

MICHAEL：『トゥルバドール』のニール・ダイヤモンド。7歳の時、母親に連れられて観に行ったんだ。

—凄い母親ですね。

MICHAEL：若いんだよ。今年、55歳になったぐらいだからね。ニール・ダイヤモンドのコンサートでは、ギタリストが女性で、物凄くノリが良くて、雰囲気も最高で、それで音楽の楽しさを覚えていったという感

を参照していただければ分かるかと思うが、彼も前述した人達同様自己のバンドBURNING WATER、そして、THE RAGING HONKIESを結成し、自分のやりたい音楽を追究しているのである。しかし、マイケルの場合、残念ながらバンドとしては、良いアルバムを作っているものの、商業的な成功は未だ取れておらず、しかもBURNING WATERも現在活動休止状態にあるということもあって、彼のギタリストとしての人気が一時的になるような展開にはなっていない。そこで、今回はそんな彼の真の実力を改めて知ってもらうために、彼のバックグラウンドとこれまでの活動歴について語ってもらい、彼の魅力に迫ってみたいと思う。

じかな。

—弟のティディ（BURNING WATER、THE RAGING HONKIESのメンバーでもあるベーシスト）はいつも一緒にいました？

MICHAEL：いや、6歳下だし、あいつはあまり音楽にのめり込んでいなかった。ベースを弾き始めたのも20歳過ぎてからだしね。子供の頃はスポーツをやったり、女の子に憧しくて趣味が全然違ったんだ。スキーが物凄く巧いんだよ。仲は良かったけど、一緒にいるんでコンサートに行ったりするのは、ここ最近になってからのことだった。音楽にのめりこんでからは、好みの音が似ているらしくて、好きなバンドの意見がいつも同じだったりするよ。

—最初に手にしたギターは何でしたか？

MICHAEL：Harmonyというメーカーのナイロン弦が張ってある初心者向けのモデルだった。確か11歳の時で、親が買ってくれたんだ。

—良い環境に育ちましたね。

MICHAEL：協力的だったんだ、何をやるにしても。僕の母方のお爺ちゃん、ベニー・グッドマンのバンドでサクソフを吹いていた。スイング・ジャズの時代から音楽好きな家系だったわけだ。アレンジャーとしても30年当時、かなり有名で活躍していたという話だよ。だから、母親もその血を受けて、THE BEATLESやロックを聴きまくっていたんだ。

—最初のギター・ヒーローは？

MICHAEL：やっぱり、ヘンドリックスだろうね。最初に彼を聴いたのは9歳ぐらいで、学校の友達にレコードを持ってたんだ。エリック・クラプトンみたいな大人のプレイは、その頃は良さが全然分からなくて、どうしてもTHE BEATLESやTHE ROLLING STONESみたいな音楽ばかり聴いていた。ヘンドリックスは、凄くエキサイティングだったね。今はもちろんクラプトンのことは崇拜しているけど…。

—当時はどういった練習をしていたのですか？

MICHAEL：1回だけジャズ・プレイヤーのジョー・バスからレッスンを受けたことがある。15歳の頃、母親に連れて行ってもらい、初めて会ったのに課題をいっぱい与えられた。彼は気難しいような感じで（笑）、僕はビクビクしていたんだ。それが唯一の正式なレッスンと呼べるもので、それからはレコードを聴きながら耳で習得していった。あと、譜面を読む集中コース、そしてインプロヴィゼーションの短期コースを、『ディック・グローヴァー音楽学校』で取ったことがあった。そこはスティーヴ・ルカサーと一緒に通ったんだ。1カ月間に週2回ぐらいのごく基本的な授業だったけど、凄く役に立ってると思う。

—ジョー・バスは教え慣れていましたか？

MICHAEL：とても巧かったよ。コードの説明にしても、「これだけ応用があるんだよ」と数年ぐらいはネタがもちろそうくらい（笑）、ヒントをたくさんくれたし、理論の話も全体的な内容を掴みやすく説明してくれて、それを自分のものにするには数年間掛かりそうだったから、あとは自分でやることにしたのさ。ジョー・バスとはそれ以来、直接会って話をしたことが

ないけど、数年前に発表された教則ビデオを買って観たんだ。内容が物凄く濃くて、びっくりしたよ。—ところで、最初にバンドを組んだのはいつのことですか？

MICHAEL：15歳ぐらいの時かな。最初からオリジナル曲を作ってプレイしていたんだ。他の校内のバンドでは、スティーヴと一緒にいくつか掛け持ちでやってたんだよ。一緒にSLAMというバンドを作ったりしたかな。あと、ベースがジョン・ピアースで、僕とスティーヴがギターを弾いていたバンドもあったけど、数ヶ月で喧嘩して解散した（笑）。ベーシストではトム・ハント、ジョン・ブリュワーというドラマーも巧かったし、周りには楽器を演っている友達がいっぱいいたんだ。もちろん、全員がずっとプロとして活動しているわけじゃないけど、ああいう環境の中で育ったことはとても恵まれていたと思う。

—その頃のスティーヴ・ルカサーとの思い出など、エピソードを教えてくださいませんか？

MICHAEL：STILL LIFEというバンドと一緒にやっていて、これは結構続いたんだ。ベースはスティーヴ・ポーカーで、ジェフ・ポーカーも1回ぐらい一緒にプレイしてくれた。最初に彼らとジャムした時は、開いた口が塞がらなかったよ。吉き良き時代って感じかな（笑）。ジョン・マクラフリンの“Hope”という曲をカバーしたのを憶えている。卒業パーティでみんなが踊れる曲をやらなくてはいけなかったのに、“Hope”みたいな7/8拍子だった？ ああいう変拍子の曲をやってみて大笑いしたんだ。そういうどうしようもないことばかりやって、ふざけてたんだよ（笑）。

—その頃からプロのギタリストになろうという意識はあったんですか？

MICHAEL：そうだね。実際、「ギタリストになりたい」と思い始めたのは12歳ぐらいからだったよ。自分にはこれしかないと思直したんだ。ライブに通うのは年齢制限があってダメだったけど、アルバムはたくさん集めていた。ここ5年ぐらいはブルースのアルバムをコレクションして、持っているアルバムを全部数えたら膨大になるんじゃないかな。

—その後、プロのギタリストとして活動するまで何をしていたのですか？

MICHAEL：高校を出て、18歳の時点ですでにハウス・バンドとしての仕事があったんだ。FEVERというバンド名で、R&Bのカヴァーバンドだった。他のメンバーは僕以外は全員黒人で、毎週末必ず仕事があったし、ギャラもなかなか良かった。LAのクレンショーにある「クアヴァーダス」というクラブでプレイしていたんだけど、残念ながらもう残ってないね。あのバンドで憶えているのは、僕が一番若くて、しょっちゅうからかわれてたってことと、とんでもない衣装を着てステージに立たなければいけなかったこと。写真が残っているけど（笑）、恥ずかしくて見せられたもんじゃないよ！ それを3~4ヶ月続けたのかな。それから、19歳になってすぐにボズ（・スキャッグス）のバンドに加入したわけ。

—何がきっかけでセッション・プレイヤーになったんですか？

MICHAEL：ボズ・スキャッグスのアルバム用としてレコーディングしたデモ・テープに参加したのが最初かな。ただ、このデモは結局アルバムに使われずじまいだったんだ。セッションと呼べるのは、キャロル・キングの娘のルイズ・ゴッフィンがアルバムだったね。あと、物凄く初期のCAPTAIN AND TENILLEのアルバムでもプレイした経験がある（笑）。

—セッション・プレイヤーになることがあなたの目標だったのですか？

MICHAEL：別に意識したことじゃないんだ。最初の頃は仕事をもらって、次の仕事にありつけるまでに4ヶ月ぐらい暇な状態が続いたからね（笑）。

—本当ですか？ 結局、ニール・ダイヤモンドの作品にも参加しましたよね。

MICHAEL：そう。あれはプロでやっていけるように



なってかなり時間が経ってからだけだね。自分が子供の頃、親のバンドだったから、CHICAGOなんかもそうだと思う。ハリウッドの『グリーン・シアター』で、テリー・キャスが生きていた頃のライブを観ているんだ。後になって、CHICAGOのアルバムでプレイできたことは凄く光栄だった。テリーは本当に巧いギタリストだったからね。

—20代前半では自分のバンドをやっていたんですか？  
MICHAEL：CARISMAというバンドをキーボード・プレイヤーのデイヴィッド・ガーフィールドとやっていたんだ。レニー・カストロ、カルロス・ヴェガ、ラリー・クライマスというラインナップで、よくライブをやっていたよ。当時からはカルロスの大ファンで、年齢が上のミュージシャン達とプレイすることにより、多くのジャズ・フュージョン系のレコードを教してもらった。週1回はショーをやっていたし、20歳の僕にはとてもエキサイティングな毎日だった。

—セッション・ギタリストとして仕事が次々と舞い込んで来るようになったことには、何かきっかけがあったのですか？

MICHAEL：スティヴ・ルカサーの力だね。彼はボズ・スキャッグスのツアー・メンバーをやっている。それからすぐにセッションをたくさんやり始めたんだけど、TOTOを結成したことによりセッションに興味を示さなくなった。ジェフ・ポーカロとスティヴの2人がしょっちゅう、僕の名前を出してくれていたんで、それで仕事が僕に来たんだと思うよ。

—そういうセッションをこなすと、必ずスタジオで鉢合わせになるミュージシャン仲間ができますよね。

MICHAEL：うん(笑)。ドラマのマイク・ペアーなんか、その頃知り合ったんだよね。今でも良い友達だけど、至る所で彼に会う時期があった。あと、リー・スクワイアもね。シーンそのものは今も昔も変わってないし、セッションをこなすミュージシャンは減ることもないし、増えることもない。それだけに、新人が定期的に仕事を回してもらうのは、相当の忍耐が必要だとも言えるけどね。

—セッション・ギタリストは、あらゆるスタイルの音楽に対応できるギター・テクニクを持っていると思いますが、どうやってそのテクニクを身に付けたのですか？

MICHAEL：基本的には、ロック系、もしくはR&Bやファンクが入ったポップ・ミュージックしか依頼され

ないからね、僕は、譜面をちゃんと読めるように、ちょっと勉強したくらいで、カントリーやクラシック・ギターを焦ってレッスンを受けにいかなくちゃいけないという状況はなかった。最初から、周りもそういうプレイは期待してないと思うよ(笑)。でも、16歳の時に半年だけクラシックのレッスンを受けたことがあるんだ。LAでは有名な女性の先生で、いろいろと教えてくれた。今の僕のプレイには全然反映されていないけど、当時凄く興味を抱いたんだ。やっぱり、今はロックが一番だと思っているけど、ロック・ギターは弾かずに、クラシックやジャズばかり聴いていた時代もあるからね。特に20代に入って、ジャズやフュージョンの名手と接することにより、ロックは今いちと思いついてしまったんだ。ただ、ジャズをやるには忍耐が必要だし、すぐにマスターできるほどやさしくないと感じたから、それからはリスニング専用なんだ(笑)。

—これまでのセッションで思い出に残っているものがあつたら、いくつか教えてもらえますか？

MICHAEL：やっぱりジョニー・ミッチェルだね。「WILD THINGS RUN FAST」で、ドラムスがケニー・カルーラ、ラリー・クライン…振り返ってみても、あれが一番楽しかったセッションかもしれない。あと、ロッド・スチュワートのレコーディングもとても楽しかったよ。まるで昔から一緒にやっていたような、素晴らしい雰囲気があった。ロッドのアルバムは毎回そうなんだ。ロッド本人もバック・ミュージシャンのレコー

## BURNING WATER結成とレコーディング術

—'91年にそのBURNING WATERを結成したわけですが、結成までの簡単な流れを教えてくださいませんか？

MICHAEL：正確には…シンガーのデイヴィッド・フレイジャーと曲作りを始めたのが'87年ぐらいからだった。自宅にスタジオがあるから、僕が曲を考えてテープに落として、それをデイヴィッドが持ち帰り、歌詞を付けるというパターンだったね。ちなみに、6月に出るアルバムはその当時作られた古い曲がたくさん入っていたんだ。僕にとってはノスタルジックなアルバムさ！(笑) 出来には凄く満足してんだ。

—BURNING WATERの音楽性は、'60~'70年代のテイストを持ったハード・ロックですが、そもそもどういった方向性のバンドをやりたいと思っていたのですか？

MICHAEL：僕とデイヴィッドはとても好み合ったんで、「とりあえず曲を作って考えてみようじゃないか」というスタンスだったんだ。BURNING WATERの1stアルバムはブルーザーなクラシック・ロックという印象で、「MOOD ELEVATOR」は割と純粋なブルースだった。確かに'70年っぽさはあるよね。1stでは特に、VAN HALENが演ったような音楽性をイメージしていたから…。

—同じセッション・ギタリストのルカサーはTOTO、ダン・ハフはGIANTというポップなメロディのロック・バンドを作り、アルバムをヒットさせましたが、今が'80年代のような音楽シーンなら、あなたも彼らのようなメインストリーム系の音楽をプレイしていたと思いますか？

MICHAEL：いや、僕は基

ディンクに最初から最後まで立ち会おうし、ビールを飲みながらみんなでリラックスしながらセッションを進めていった。とりあえずテクニクはOKが出ると「よし、一杯飲みに行こう」とバーにみんなで直行して(笑)、ほとぼりが冷めるとまたスタジオに戻ってきて作業を続けるって言う…まるで、終わることのないどんちゃん騒ぎだったよ！

—リチャード・マークスの作品にも初めから参加していますね。

MICHAEL：うん。だいたい全部、プレイしているんじゃないかな。実はちょうど新譜のレコーディングが終わったばかりで、もうすぐリリースされるはずだよ。リチャードにとっては久しぶりのアルバムだね。最近だと浜田麻里のアルバムでもプレイしたし、ジェイミー・ウォルターズの2ndアルバムでも弾いている。これは最近レコーディングしたばかりだから、まだ当分、出ないだろうけど。

—セッションとしてレコーディングする時、最も注意をしなければならない点は何ですか？

MICHAEL：それぞれの要求に応えること。自分でやりたいことは、自分のバンドでできるし、それがBURNING WATER結成の動機だったからね。ああいうスタイルは普通のセッションでは絶対リクエストされない。ただ、ジョニー・ミッチェルだけはいつも冒険心があって、「どんだん実験的な試みに挑戦していこう」と言う人だったから、とても楽しめるんだけどね。

本的に好きなことしかやらないからね。あまりコマースナルなスタイルとは言えないのは分かっているけど、僕としては自分が満足いく音楽を作ることか大切なんだ。

—デイヴィッドとは聴いて育った音楽も似ていたんですか？

MICHAEL：彼はシンガー・ソングライター系が好きだったよ。トッド・ラングレンとかね。デイヴィッドはNOISE NEXT DOORというバンドをやっていて、僕が彼らのデモを作るのに手を貸して、それがきっかけで知り合ったんだけど、その頃の音楽性はかなりポップだった。デイヴィッドもそれゆえR&Rをやりたいと言って、それで一緒に曲を書き始めたんだ。

—BURNING WATERというバンド名は誰が考えたんですか？

MICHAEL：同名の曲があるから、多分、歌詞を書いたデイヴィッドだろう。バンド名がずっと決まらなくてすごく苦労したのは憶えているんだけど、誰のアイデアだったかはもう忘れてしまった。

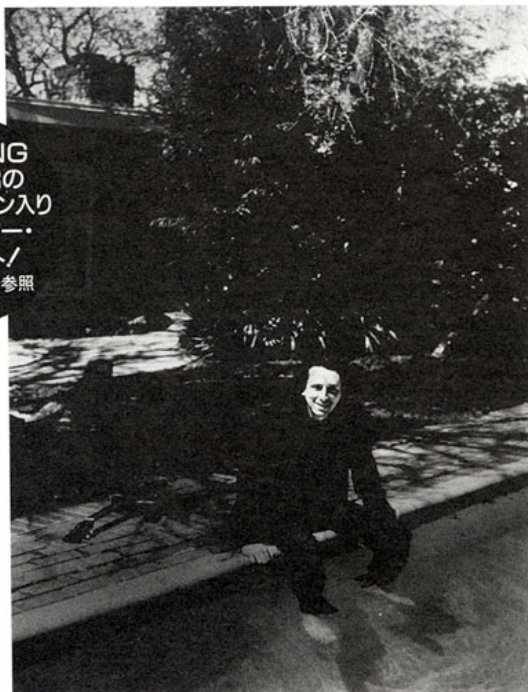
—今回の新作に入っている、その当時の古い曲というのはどれになるんですか？

MICHAEL：“Pictures Painted Upside Down”は2人で作った最初の曲かもしれない。'87年ぐらいに作ったんだと思うよ。前からアルバムに入れたかったんだけど、どうしても作風が他と合わなくてずっとキープしていた。この曲のソロは、僕のギター・プレイの中でも最高の出来だと思っている。凄く傲慢に聴こえてしまわないと良いんだけどね(笑)。そのぐらい満足しているということさ。“Push Push” “Where Nobody Went” “Fade Rose”…この辺りもかなり初期の作品で、'92年頃にグレッグ・エドワードとレコーディングしたんだ。

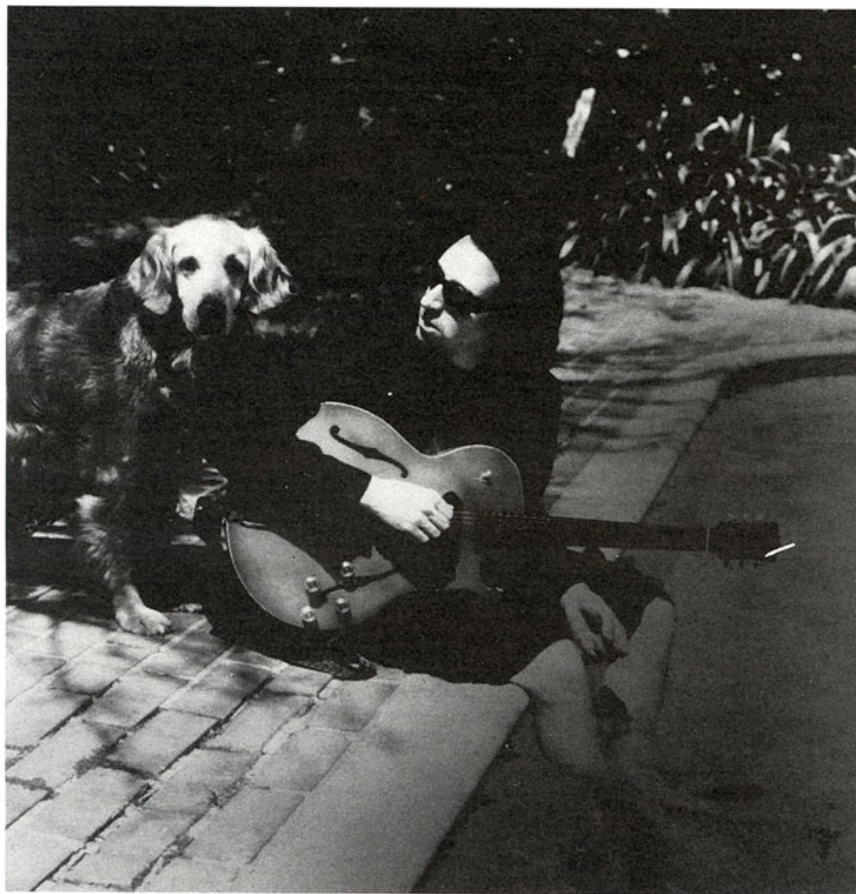
—自分ではソングライティング面で成長の後を感じますか？

MICHAEL：いろいろな曲が書けるようになったよね。このアルバムをまとめていて、昔作った曲も自分で気づかなかつただけで、「どれも良いな」と改めて実感したんだ。曲が完成した直後というのは、何度も繰り返し直したりした後で、それだけでウンザリしちゃうものなんだよね。数年ぐらい忘れたままにしておいて、改めて聴き返すと凄く新鮮で、同時に十分コンテンツラリーだったりするんだ。

BURNING WATERのメンバー・サイン入り Tylerギター・プレゼント/ 詳しくはP.171を参照







—普段ラックにたくさんのエフェクトを入れているのに、BURNING WATERでのギターサウンドに関しては、とてもシンプルですね。敢えてそうしているのですか？

MICHAEL：そうだね。アンプとファズボックスぐらいで、他のエフェクターはあまり使わなくなってきている。シンプルな音が好きなんだ。BURNING WATERのアルバムでは、基本的にはラックはほとんど使っていない。たくさん積み上げてあるけど、それはセッション用に揃えてあるだけさ。BURNING WATERのレコーディングではじっくり時間を掛けて、納得のいくサウンドに仕上げることができたけど、セッションはそうはいかないだろう？ 自分のアルバムだったら、キャビネットを運んで来てフロントとバック両方にマイクをセットして、レコーディングしたり、奇抜なアイデアにどんどん挑戦できる。もちろん、余裕のあるセッションもたまにあるけど、時間が限られている場合

は、できるだけラックを利用して短時間で良い音を出すことに専念するんだ。

—今回のレコーディングで使ったギターは？

MICHAEL：一番多いのはストラトキャスターかな。ピックアップはSeymour Duncanで、ブリッジにハムバッカーがマウントしてあるストラトが多い。そうじゃなければ、曲によって普通のストックのストラトを弾いているかどちらかだね。あとはSeymour Duncanの付いたTylerか、Fenderストラトのライシューか、どちらかだ。

—そのTylerのギターについて教えてもらえますか？

MICHAEL：うん。かなり前からステイヴン（・タイラー）とは付き合いがあるからね。もう10年以上前から僕のモディファイを担当してくれていて、彼がギターを作り始めた頃から関わっているんだ。Tylerのギターは今でも全部、手作業で作られているし、最近では大きな機械がショップに置いてあるけど、行程は全部

人間がやっている。数年前からレスポールJrだとか、ストラト以外のシェイプも作るようになっていたんだ。ちなみにショップはヴァン・ナイズにあるよ。

—あなたは自身のGibsonのレスポールやSGを弾くことはなかったんですか？

MICHAEL：そうだね、ずっとストラト派だった。でも、5年ぐらい前からギターのコレクションを始めて、いろいろとトライするようになってきたんだ。ライブをやる場合は必ずストラトなんだけどね。ストラトだと何でもまかなえるから、ショウをやる時は手放せない。

—レコーディングする時は、何本もギターを持って行って、曲にあったギターを選ぶのですか？ それともいつもメインにしているギターがあるのですか？

MICHAEL：セッションの場合は、3〜4本持っているんだ。そのSeymour Duncanとブリッジにハムバッカーが付いたTylerを必ず持っていき、あと'64年製のストラトキャスターだね。これはBURNING WATERのアルバムでメインに使っているんだけど。あとは'91年製のカスタム・ショップ・レスポールかな。今、メインで使ってるのはこの3本だよ。

—今、ギターは何本持っているのですか？

MICHAEL：50本弱かな。アコースティックは5本ぐらいで、ほとんどがエレクトリックなんだけど。気に入ってるのはたくさんあるから、どれか選ばなくてはならないのは難しいな(笑)。ジャクソン・ブラウンのツアーに参加した時、その頃もツアー先で必ず「良いギターはないかな」とギターのマーク・ゴールデンバーグと共に片端からショップに顔を出していた。高くつくおもちやだね！

—あなたはBURNING WATER以外に、THE RAGING HONKIESというバンドもやっていますが、それについて教えていただけますか？

MICHAEL：結成は'94年の1月で、ベースは弟のデヴィ、そしてドラムスはエイブラハム・ラポリエルJrというメンバーで、ずっとトリオでやっている。BURNING WATERよりハードな路線でいこうという空気があったから、そのままどんどんジャムっていった曲を書いたんだ。

—今後はバンドとセッションの両方を行なっていく予定ですか？

MICHAEL：そうだね、予定はどんどん入ってくるからね。スペイン人のアーティストのルイス・ミゲールのアルバムにも参加することが決まっているよ。

—バンドとして成功するには何が必要だと思いますか？

MICHAEL：それは難しい質問だね。THE RAGING HONKIESとしては2ndアルバムのレコーディングを終えているんで、定期的にショウケースをやっているんだけど…まあ、とりえあえず続けることが明心だし、もしかしたらヨーロッパのレーベルと契約するかもしれない。アルバムのリリースが決定したら、またどんどんライブをやりたいですね！

## BURNING WATER



■BURNING WATER  
'93年 Polydor (原盤)

① Burning Water ② Dream Out, Dream In ③ Slave To My Passion ④ Sister Big Bonee ⑤ I Herja ⑥ I Wish You Were Mine ⑦ Hot Blood ⑧ Yes Man ⑨ Think Just Like A Man ⑩ Red Blues  
★ BURNING WATERのデビュー作。



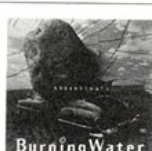
■MOOD ELEVATOR  
'94年 バイオニアLDC [CD] PICP-1042

① Brave New World ② Doin' Myself ③ Mood Elevator ④ Burning Of The Midnight Lamp ⑤ Can't Buy My Way Home ⑥ Fun Thang ⑦ Pro Life, Pro Choice ⑧ Watch It Burn ⑨ Save Sweet Sister ⑩ Killing Time  
★ 楽曲にまとまりが感じられる2nd。



■LIVE AND LIT  
'96年 バイオニアLDC [CD] PICP-1094

① Dream Out, Dream In ② Pro Life, Pro Choice ③ I Heardja ④ I Wish You Were Mine ⑤ Yes Man ⑥ Circle The Wagons ⑦ The Wind Cries Mary  
★ ライブ・ミニ・アルバム。



■ABBANDONATO  
'96年 バイオニアLDC [CD] PICP-1103

① Push Push... ② No Reflection ③ Places Where Nobody Went ④ Faded Rose ⑤ "D" The Diamond (Song For David) ⑥ Venus's Daughter ⑦ Goodbye Guiding Light ⑧ Only The Prettiest Things ⑨ Circle The Wagons ⑩ One Lousy Reason ⑪ Pictures Painted Upside Down ⑫ War Cry  
★ リズム・ギターから聴かせる最新作。

## THE RAGING HONKIES



■WE ARE THE BEST BAND  
'95年 Smashed Hits [CD] TRH001-2 (アメリカ盤)

① Don't Make Me Hate ② Save Me Some Love ③ The Sun ④ Machine ⑤ What Am I Doing ⑥ My Days Are Crazy ⑦ I'll Get Away ⑧ Don't Tell Me How To Live ⑨ No Rest ⑩ Oh My  
★ マイケルの別プロジェクトのデビュー作。





pic ● Hiroshi Homma

## GIVE AWAY

# マイケル・ランドゥ・サイン入り James Tylerをプレゼント

**James Tyler  
Michael Landau  
Signature Model**



▲「James Tyler」のロゴはヘッド側面にもプリントされている。ペグは Schaller製のロック・タイプを搭載。



▲プレイ時に肘が当たらないようにコンター加工された部分には、ペイントが施されていない。



▲ボディに施されたペイントは艶消し仕上げになっており、カラフルでありながら落ち着いた雰囲気を持っている。



▲フロント/ミドルには Seymour Duncan製のピックアップをマウント。ハーフ・トーンが抜群に良い。



いわゆる「ストラトキャスター・タイプ」のギターの中にあつて、James Tyler (以下 Tyler) はプロ・ミュージシャンの間でも非常に高い評価を得ているブランドの1つだ。同時に、超一流のセッション・ギタリストであり自己のバンドを率いて活躍する、マイケル・ランドゥとのコラボレーションもよく知られている。実際ランドゥはタイラー氏がギターを作り始めた頃から関わっているそうで、Tylerがここまでビッグ・ネームになったのはランドゥの力によるところも大きい。彼はセッションやライブで、必ずと言っていいほど Tyler をプレイしているのだ。

Tylerの特徴は、その直線的で厚みのあるヘッド・ストックのデザイン (何と正面ばかりでなく側面にもロゴがプリントされている)、世界中の高品質なパーツを組み合わせていること、そして今も総て手作業で作られていることだろう。例えば、スタジオ・エリート「サイケデリック・ヴォミット」と呼ばれる「ランドゥ・シグネチャ・モデル」は、極めて重いボディに溶岩のような模様を描いたカラフルなフィニッシュが施され、ピックアップには Duncan、トレモロ/ブリッジは高機能と音質を両立させた定評のある Wilkinson、ペグは Schaller のロック・タイプを採用している。コントロールは1ボリューム、2トーン、5ウェイ・セレクターとオーソドックスだ。しかし、元々 Tyler はカスタム・メイドが基本となっているため、「クラシック」「スタジオ・エリート」などのモデルをベースとして、微妙にスペックが異なってくる。ボディ材はアルダーかアッシュ系、フィンガーボードはローズウッドかメイプル、ブリッジも Schaller 製のロック・トレモロまたは Wilkinson 製を選ぶようになっているのだ。ピックアップは Duncan と、これも Tyler で有名になった Lyndy Fralin、コントロール系はミッド・ブーストやピックアップのシリーズ/シングル/パラレル切り替えスイッチなどを組み込むこともできる。つまるところ、ギタリストが自分の好みに合わせてカスタマイズすることが可能ということになるわけだ。

ランドゥは特に (リアではなく) フロントとセンターのシングル・コイルをミックスしたフェイス・アウト・サウンドを好む。ピッキングする位置も、多くのロック・ギタリストがブリッジ寄りなのに対し、比較的ネック寄りだ。彼のアイドルであったジミ・ヘンドリックスやスティーヴィー・レイ・ヴォーン風の骨太いサウンドを出すためもあるという。高価なラック・システムを所有しながら必要以上のエフェクトも掛けないし、ギミックも用いない。まさに Tyler を信頼してなければ、できない芸当である。彼のようにオールラウンドなプレイを目指すギタリストなら、どうしても欲しくなる逸品といえるだろう。 (大塚康一)

### 応募方法

ご希望の方はハガキに① James Tyler ギターのイメージ② BURNING WATER の新作「ABBANDONATO」で気に入った曲とその感想③ マイケル・ランドゥの魅力は何だと思えますか?④ マイケル・ランドゥが過去に行なったセッションで気に入っているものは?⑤ マイケル・ランドゥが新しいバンドを作るとしたら、ヴォーカル、ベース、ドラムに誰が参加して欲しいですか? (実際に可能性のあるアーティストを挙げて下さい)⑥ 他に好きなギタリスト (1人)⑦ 最近買った CD⑧ 今後、深く知りたいギタリスト or ジャンル 以上を明記の上、住所・氏名・年齢・性別・電話番号をお書きの上、P.161「BUFFER ZONE」内の応募券を貼って以下の宛先までお送り下さい。応募券のないものは無効になりますのでご注意ください。

宛先 ● 〒101 東京都千代田区神田小川町 2-1

シンコー・ミュージック GIGS 編集部

「guitar マイケル・ランドゥ」係

締切 ● '96年 7月 15日 (月) 消印有効